



2023年 1月30日
第120号

JR 東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本

発行人 助川一実

編集情宣担当

ホームページ

<http://www.jreu-yokohama1.jp/>



イーハトーブ

1月30日号

昨年、日本で32年ぶりとなるガブリエル・シャネルの仕事に焦点を当てる回顧展が開かれた。来場者にはサプライズでシャネルN05のフレグランスサンプルが配られた。

1883年、通称ココ・シャネルはフランスに生まれる。幼くして母を亡くし、父に捨てられ孤児院で育った。18歳で孤児院を出て、社交場で歌い手として働く。その後、恋人に出資してもらい、自らの店を開く。ここからデザイナーとしてのシャネルが始まる。

19世紀女性のファッションはコルセットで体を締め付け、前に突き出した豊かな胸と細いウエスト、後ろに突き出したヒップ、このSカーブシルエットが常識だった。さらに裾の広いスカート、レース、刺繍、宝石などで着飾る。息がしづらく動きにくい華美な服装に金を出すのは夫か愛人である男性であり、女性のファッションは男性たちが富をひけらかすツールだった。

シャネルはそれらに「ノン」を突き付けた。当時、馬の調教師の衣服に使われていたジャージー素材で動きやすく着心地の良い女性の服を作った。その後、喪服にしか使われなかった黒を用いたリトルブラックドレス、宝石を富の象徴から切り離れたイミテーション・ジュエリー、女性の両手が自由になるショルダーバッグ、「女性の香りのする、女性のための香水」と作られたN05など、「自分自身が身につけたいもの」をシャネルは作り続けてきた。それが女性たちに支持されてきた。

シャネルの功績は女性のファッションを変えたことだけではない。ファッションを変えたことにより、女性の解放と権利を確立してきたのだ。

シャネルの有名な言葉がある。「ウエストミンスター公爵夫人なら3人いるけど、ココ・シャネルは1人しかない」

彼女は恋多き人生で結婚の機会もあった。しかし一度も結婚も出産もしなかった。恋人に出資してもらった資金は全て返済した。87歳で亡くなる前日まで働き続けた。亡くなったのは仕事場近くのバスルームとベッドがあるだけの部屋だ。

彼女は最後までココ・シャネルとして生きようとした。女性でも、妻でも、母でもなく、自分らしく生きるためには1人で生きるしかなかったのではないか。

日本では岸田首相が「従来とは次元の異なる少子化対策」を表明したが、自民党の衛藤少子化対策調査会長は「4年制大学を出た女性が地方に帰りがらない」「女性が働ける職場を全国で作らなければ問題は解決しない」と発言している。少子化対策では、いつも「女性」が主語になることに私は不快感がある。

昨年、国連が「完全なジェンダー平等実現には、現在の進み具合だと300年近くを要する」と報告書を公表した。生きているうちは「女性だから」と型を押し付けられ、線を引かれることから逃れられないという事だろう。

深い絶望に襲われるがサプライズでいただいたシャネルN05を身に纏い、厳しい現実の中を私も私らしく生きていきたいと思う。(M・W)

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちが外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行っていきます。